
清末中国における西洋近代産業 導入に貢献した外国人

田 育 誠

目 次

はじめに

- 一、イギリス人ハリディ・マッカートニー (Halliday Macartney, 中国名馬
格) と蘇州洋砲局・金陵 (南京) 機器製造局
- 二、中華系アメリカ人容閔と (上海) 江南製造局 (総局)
- 三、フランス人プロスペ・M・ジケール (Prosper Marie Giquel, 中国名日
意格) と福州船政局
- 四、ドイツ人グスタフ・フォン・デートリング (Gustav von Detring, 中国
名徳璫琳) と西洋近代産業導入
- 五、清末中国への西洋近代産業導入過程におけるマッカートニーなど四者の
類似性

結 び

はじめに

19世紀後半清末中国が西洋技術を導入する過程においては、概ね三つのグループに分類できる人々が参与していたといえることができる。

第一のグループは、清朝政府首脳部の一部高級官僚、即ち洋務運動のリーダーたちであり、その中で特に有名なのが曾國藩、李鴻章、左宗棠などである。彼らは率先して西洋技術の導入を図るとともに、中国最先端の近代企業

の設立に努めたが、その主要なものは軍需工場と造船所である。彼らは太平天国の騒乱の中で、西洋式銃や大砲、蒸気戦艦の威力に初めて触れ、中国の武器装備の改良の必要性を強く感じたが、西洋列強との二度にわたる阿片戦争に敗れて、西洋式兵器の製造と西洋式軍需工場の建設を急がなければならぬことを更に痛感した。そうしたことから、彼らは、強大な政治力と潤沢な資金力によりこれらの事業を強力に推進していった。第二のグループは、西洋技術導入に直接貢献した技術者たちで、その中には中国人もいれば外国人も存在した。外国人技術者の数は相対的には少ないが、彼らは初期段階において高い技術を必要とする仕事を担当し、また経験の乏しい中国人労働者の指導を行うなど重要な役割を果たしている。第三のグループは、第一・第二グループの中間において力を発揮した人々である。彼らは、しばしば清朝政府顧問、設計士、情報管理者、軍艦や機器類などの購入担当者、企業経営者等、様々な役割を同時に請け負っており、経験しない仕事はほとんどないという状況であった。彼らは清朝政府首脳部、西洋諸国の軍艦・機器等の購入交渉相手、西洋人技師、中国人の見習い、現場の労働者などを相互に結びつける重要な働きを果たした。彼らの存在により始めて西洋技術の導入が行われ、各種の洋務企業が設立されてその後の進展が図られたといっても過言ではない¹⁾。

この第三のグループの人々が、まさに本稿の中心人物である。これらの人々は、才能に富み、高い志を備えた人たちであり、そうした資質を備えた人たちであって始めて、中国が西洋技術を導入するに際しての「中間人」としての役割を果たすことができたといえよう。以下、そうした中間人の代表ともいふべき、イギリス人ハリディ・マッカートニー (Halliday Macartney, 中国名馬格里), 中華系アメリカ人容閔, フランス人プロスペ・M・ジケール (Prosper Marie Giquel, 中国名日意格) 及びドイツ人グスタフ・フォン・デーtring (Gustav von Detring, 中国名德瑾琳) の四名について彼らの事跡を検討していくこととする。

1. イギリス人ハリディ・マッカートニー (Halliday Macartney, 中国名馬格里, 1833年～1906年) と蘇州洋砲局・金陵(南京) 機器製造局

マッカートニーは、1858年にイギリスのエディンバラ大学医学部の学位を取得した後、イギリス軍の軍医になった。1860年の初め、彼の所属部隊は第二次阿片戦争で中国に派遣され、まず北京を占領し、次いで広州に進駐した。彼は、勤務の合間を中国語の学習に費やした。彼は清朝政府からの強力な誘いを受けて、軍医を辞職し清朝政府のために働くこととした。彼はイギリス軍内部での信頼も厚く、彼が辞職することについて反対はなかった。彼は表向きは中英混合軍「常勝軍」の秘書であったが、実質は清朝政府洋務派首領李鴻章の秘書であった。その当時中国は西洋製武器購入のために毎年多額の金額を費やしていたで、マッカートニーは中国が自国で武器を製造することを提案した。マッカートニーは後に、そのときのことを、「私はまずはじめに、李鴻章に対して弾薬購入費用が過大であることを指摘した。私は彼に対して西洋諸国は自国の大規模な弾薬工場を所有しているので、中国もこうした工場を持つべきであると提言した。李鴻章は私の提案の意味合いは十分に認識したが、当時の中国の技術力では実現できないのではないかと危ぐしていたので、私は様々な方法を用いて説明し工場建設を進めるよう説得した。その説得の過程で次のような出来事があった。私は大砲の砲弾を製造して李鴻章に提出していたが、李鴻章はイギリスのスダフリー将軍が見学を訪れたとき、それらの砲弾を将軍に示してその出来具合について意見を求めたことがあった。将軍の答えは砲弾のレベルは非常に優れているであった。その後、私は李鴻章から50名の労働者を雇い入れることを命ぜられ、上海郊外松江のある寺院を工場として、一台の機械も一炉の溶鉱炉も無い状況から弾薬製造に取り掛かった。」と述べている。1863年12月、李鴻章が太平天国軍に蘇州を奪われたため、その影響でマッカートニーの工場も移転せざるを得なくなったが、この出来事が中国近代最初の国立軍需会社

「蘇州洋砲局」を誕生させるきっかけとなった。移転の途中、マッカートニーは西洋の最新の軍事機器が中国に入ってきたとの情報を得たので、李鴻章に対しそれらの機器を購入するよう提言し、李鴻章はこの提案を受け入れた。機器類が輸入され、それらが箱に入ったままの状態で工場内にバラバラに放置されているのを見て、李鴻章はこんな無用のものに多額の金を支払ってしまったと嘲弄した。マッカートニーは直ちに機器類の組立てにかかり準備が整うと、李鴻章に記念式典のテープカットを依頼した。テープカットの後、李鴻章が工場内を視察しているとすべての機器類がいっせいに動き出した。こうしたこともあって、李鴻章はマッカートニーを高く評価するようになった²⁾。

1865年、李鴻章は两江総督に任ぜられ南京に赴任し、それに伴ってマッカートニーと軍需工場も南京に移転した。李鴻章は翌年には、捻軍鎮圧のため北方に去った。離任直前、李鴻章はマッカートニーと中国人の責任者の二名を外国との交渉担当に任命したが、この任命は李鴻章の幕僚としてのマッカートニーの生涯のうちの頂点といえるかも知れない。マッカートニーの工場はますます盛業し、新しい会社は「金陵機器製造局」と命名された。マッカートニーは頭が切れるうえに、経営能力にも長けていた。外国から材料や機器類を購入する際にも商人たちから騙されることはなく、また外国人技術者や中国人労働者たちも仕事の手を抜くことはできず懸命に働かなければならなかった。マッカートニーは、西洋軍事工業の最新の発達に追いつくために全精力を費やし、最新で複雑な機器類の導入を繰返し図り、さらにそれらを利用してさらに複雑な機器類を製造していった。彼の働きにより中国各地にこうした軍需工場が建設され、中国の近代産業化に大いに貢献したといえることができる〔図1〕。1874年6月、マッカートニーは7カ月間の欧州視察を実施した。金陵機器製造局で使用する最新の設備・機械の購入契約を果して中国に戻り、彼は直ちに天津に赴き李鴻章に対して今回の視察と設備・機械購入に関する報告を行った。その後、李鴻章はマッカートニーに対して

徐々に不満を持ち始めるようになっていった。すなわち、マッカートニーが部下の外国人技術者たちに誠心誠意中国人労働者を指導させていたならば、中国人労働者の技術はもっと向上していたのではないかと、外国人技術者と同じように数年前から働いている中国人労働者の技術が一向に向上せず、現在も外国人技術者に依存していることなどである³⁾。1875年1月、金陵機器製造局で製造した大砲が軍事演習中爆発し数名の兵士が爆死するという事故が起こった。事故の五週間後、李鴻章はマッカートニーを解任したが、そのとき、清朝政府は初代駐英公使に郭嵩燾を派遣することとしていたので、李鴻章はマッカートニーを郭嵩燾の英文担当秘書として推薦した。1876年、マッカートニーは郭嵩燾とともに中国を離れた。その後約30年間、ロンドンの中国大使館に勤務し、その間かなりの強い影響力を持つ地位に在職した。1885年には、イギリス王室から「サー (sir)」の称号を授与された。

2. 中華系アメリカ人容閔（1828年～1912年）と（上海）江南製造局（総局）

容閔は広東省香山（現在の珠海市）の出身である。広東省は中国で最初に西洋の影響を受けたところである。容閔は1841年マカオの教会学校に入り西洋式教育を受けた。1847年、彼の先生のひとりであるアメリカ人宣教師サミュエル・ブラウン（中国名塞繆爾・布朗）が帰国の際、彼をアメリカに同行した。その後、彼はエール大学に入学し、1854年に卒業した。彼はアメリカの大学の学位を取得した最初の中国人留学生といえる。彼はアメリカの国籍を取得したが、彼の理想は中国が近代産業を導入して発展することであり、自分が手助けして中国人が西洋式教育を受けられるようなシステムづくりを実現したいと考えていた。彼は自伝の中で「次世代の中国人は私の受けた西洋式教育の良いところを享受すべきである。そして西洋式教育を受けることによって、中国は変貌して近代文明を持つ強大な国になるかも

しれない。これらを実現することが私の遠大な夢である。」と述べている。

1855年、彼は中国に帰国した。その後10年間、彼は中国のために尽す機会をずっと探っていたが、自分の理想を実現することのできる知り合いにやっとめぐり合うことができた。1863年、容闳上海で李善蘭、張斯貴、華蘅芳、徐寿と友人になり、その後彼らの推薦で南京において曾国藩に会う機会を得た。曾国藩は当時建設計画中のある機器工場に導入する外国製機器購入交渉に派遣する適当な人物を物色中であった。容闳は西洋の言語と仕事について熟知し、上海において既にいくつかの仕事をやり遂げており、そのうえ祖国に奉仕したいという強い願望を持つ人物のひとりであったので、曾国藩から命じられて西洋科学書籍の翻訳や蒸気船の実験に従事している李善蘭たちから推薦を受けたのである。最初の会見の二週間後曾国藩は容闳を再度招いた。容闳は会見前に友人たちから曾国藩総督大臣の意向をあらかじめ聞いていた。曾国藩の質問は、「中国で現在最も重要なことは何だと思えますか?」であった。容闳は本音では西洋に中国人留学生を派遣して学習させる計画を提言したかったが、それは言うことはできなかった。彼はあらかじめ考えていたように、「機器工場を建設することである。」と冷静に答えた。さらに彼は曾国藩たちに、中国は専門的機器ではなく、何でもつくりだせる汎用機器を購入すべきであると提言した。容闳は後に「私は彼らにまず母体の工場を建設し、さらに母体工場を基幹として他の新しい工場を建設すべきである。そして新しい工場で新しい機器を製造し、さらに新しい製品を作り出していく。つまり購入する機器は軍事用機器のみならず、何でも造りだせる機器でなくてはならないと提言した。」と述べている⁴⁾。二度目の接見後の1868年、曾国藩は容闳に対して国外において外国機器購入交渉をおこなう権限を与えた。曾国藩は機器に関する知識が乏しかったので、容闳に対していかなる国の、いかなる種類の機器の購入もおこなえる権限を与えたのである。容闳はアメリカ・マサチューセッツ州のポートナン機器会社と機器購入契約を締結し、使命を果たして帰国した。容闳の購入した機器は有名な

江南製造局（総局）の基幹設備となった。こうした功績により彼は曾国藩の推薦を受けて、「五品候補同知」の階級を授与された〔図2〕。その後、容闳は上海で上海道台丁日昌とたまたま知り合う機会を得た。丁日昌は後に江蘇巡撫に就任する人物であるが、かれは曾国藩や李鴻章とも良い関係にあり、さらに「改革開放者」としても知名度が高かった。そこで容闳は留学生派遣計画を含めて四項目の提案を行った。すなわち、留学生を派遣すること、汽船会社を設立すること、鉱山を開採することそして外国人宣教師の特権を制限することである。丁日昌は容闳の提案書を曾国藩に提出し、曾国藩はそれを朝廷に上申した。朝廷はその件に関して直ちに裁可した。清朝政府は小学生の中から優秀な120名を選びアメリカに留学させることを決定した。容闳は引率監督者二名のうちのひとりに任命された⁵⁾。1871年、留学のための準備作業が開始された。1872年、留学生の第一グループが容闳の第二の故郷、アメリカに出発した。1872年から1878年にかけて、彼は留学生の監督者のほか、いくつかの重要な任務を果たしている。容闳の自伝によれば、彼はアメリカのガトリング社と契約し、当時の最新鋭の武器、機関砲を中国に輸入している。容闳は自伝の中で、「中国が最新の教育を受けた人材を擁するだけでなく、最新鋭の武器を所有することができるようになることを私は切実に願っている。」と述べている。他の資料によると、容闳は李鴻章に対して水雷艇などいくつかのアメリカ製の軍事工業製品を推薦するほか、鉄甲戦艦に関する情報を提供している⁶⁾。1878年から1881年にかけて容闳は中国駐在副公使という重要な任務を果たしている。1883年春、彼はアメリカに帰国し、その後12年間、彼は家族とともにコネティカット州で静かな生活を送った。1894年、日清戦争の勃発に際して、彼は洋務運動の新しい指導者である張之洞に対して二項目の提案を行った。張之洞はそのうちのひとつを採用することとし、容闳に対してその実施を命じた。命令の内容は中国の防衛強化策と対日強化策であり、そのために容闳自身がイギリスに赴き西洋各国から多額の借款をおこなうというもので

あった。この計画については、清朝政府内の李鴻章をリーダーとする一部の官僚たちが反対したため、部分的には達成することができたが、全体としては不十分な結果に終わった。ロンドンにおける使命を終え、容闥は張之洞の招きで中国に戻った。容闥は後に、「今回の会見を通じて私の立場は李鴻章側から張之洞側に変わった。」と述べている。しかしながら、容闥と張之洞の会見はあまり良い結果を齎さなかった。容闥はさらに数年間中国に滞在し、いくつかの改革案を提出したが、どれもあまり良い結果を齎さなかった。彼は、アメリカに帰国し最後の10年間を過ごした後、1912年に亡くなった。著書に著名な「西学東漸記」(1909年)がある。

3. フランス人プロスペ・M・ジケール (Prosper Marie Giquel, 中国名日意格, 1835年~1886年) と福州船政局

ジケールは、1857年英仏連合軍の一員として中国に渡り、第二次阿片戦争に参加した。彼はフランス海軍学院を卒業し、当時海軍の尉官であった。英仏連合軍は、1858年1月に広州を占領、その後「英仏中三方委員会」を組織し、広州の管理を請け負った。ジケールは委員会の助手として派遣され、1861年10月、英仏連合軍が撤退するまでその職務を担当した。この時期に彼は中国語を学び、中国人やイギリス人と交わり多くの経験を積んだ。英仏連合軍撤退の際、彼はそのまま中国に留まることを願い出て認められた。彼の活躍のチャンスは直ぐに与えられた。ジケールは中国語と英語を話すことができたので、総税務司H・ネルソン・レイ (Horatio Nelson Lay, イギリス人, 中国名李泰国) の紹介で、清朝政府の税関に職を得た。ところで、当時の中国税関はきわめて特殊な状況にあり、清朝政府の機関でありながらその業務については始めから西洋人、特にイギリス人がコントロールしており、主要な業務については西洋人雇員が充てられていた。関税が急速に清朝政府の財政収入の主要な財源のひとつになるにしたがって、彼らの活動

は清朝政府にとってもきわめて重要なものとなっていった。一方、イギリス本国政府も彼らが中国語と税関事務を熟知しているということから彼らを貴重な人材として認めていた。ジケールは1861年、H・ネルソン・レイから寧波税関に派遣され、その後上海、漢口税関長を歴任することとなるが、寧波税関に着任した矢先、寧波は太平天国軍によって占領され、彼はやむなく税関を閉鎖せざるをえなかった。1862年5月、清朝政府が寧波を奪回すると、彼は寧波に戻り税関業務を再開するとともに、浙江巡撫左宗棠の要請により寧波で中仏混合雇用軍（後に「常捷軍」と呼ばれる部隊である。）の組織づくりに着手した。彼の部隊は太平天国軍を何度も打ち破ったが、その勝利は、西洋の大砲や鉄砲などの先進装備と太平天国軍の貧弱な装備の差によるものであった。左宗棠は、ジケールのこうした戦功により「常捷軍」の重要性を認め、1863年9月から常捷軍と密接な繋がりを持ち始めたが、1864年10月に太平天国運動が失敗を見るに到って常捷軍も解散することとなった。この時期ジケールと左宗棠は良好な関係にあったが、左宗棠は常捷軍のもうひとりの指揮官である、フランス海軍軍官ダクベイユ（Paul d'Aiguebelle, 中国名徳克碑, 1831年～1875年）とも良好な関係にあり、二人は左宗棠が密接な関係を持つ数少ない外国人であった。左宗棠は朝廷への上奏文中に、「ジケールとダクベイユは全ての外国軍官の中で最も恭順である。」と記し、またある書簡の中でも「常捷軍の成功は二名のリーダー（ジケールとダクベイユ）に負うものであり、彼らは誠実で、素直で、人の意見を聞くことができ、中国官僚と全面的に協力できる。」と称賛している⁷⁾。1866年、左宗棠は彼らを福州へ派遣し、「福州船政局（福州造船所）」建設の計画立案から建設、実行までを行わせた。左宗棠の厚い信任をバックに、ジケールとダクベイユは、わずか2年で中国最初の近代機器造船所である福州船政局と福州船政局附属水師学堂をつくりあげた。ところで、当時のフランス駐中総領事と公使は、フランス政府はこの福州造船所建設に一切関わるべきでないと主張していた。彼等は、福州造船所建設計画は単な

る「省」級（地方レベル）の建設プロジェクトに過ぎず、計画もしっかりしておらず、失敗する可能性が極めて高いと予測し、フランスが関わって面子を失うことを恐れて反対したのである。フランス外務省はこの見解を支持し、フランス海軍も計画に厳しい疑いの眼差しを注いでいた。その後フランス政府は調査を重ね、ついに福州造船所建設計画は清朝政府が重視する国家プロジェクトであり、一地方官僚が決定する単なる地方レベルの建設プロジェクトではないと確信して、ジケールの妨害をしないことを決定した。フランス政府は、ジケールが引き続きこのプロジェクトに関わることに同意したのである。

左宗棠はジケールを福州造船所の正監督に任命し、ダクベイユは計画段階から大きな貢献をしたにもかかわらず副監督にとどまった。ダクベイユは常捷軍の解散前の1864年9月には既に左宗棠のために造船所に関する計画案を練り上げていたが、ジケールはその5カ月後にやっと積極的参加を始めたばかりであった。ジケールが正監督に任命された理由のひとつとして、彼の中国語の会話能力が飛びぬけて優れていたことがあったようである⁹⁾。一方ダクベイユは中国語が通じず、左宗棠との間で十分な意思疎通が図れなかったようである。ダクベイユはジケールとの意見の違いから1870年3月に福州造船所を離れたが、ジケールは1874年の雇用契約満了まで引き続いて正監督を務めた。彼は7年間の在任期間中に、近代的造船所を建設し、15隻の蒸気船を建造した〔図3〕。さらに重要なこととして挙げられるのは、彼が附属造船学堂において設計者や操縦士、船長などの人材を養成したことである。彼らはその後中国近代海軍で専門的な分野に従事した。清朝政府の造船担当のある官僚は朝廷への上奏文中に「ジケールは雇用契約の各項目を十分に履行しており、その業績は称賛すべきものがある。」と記している。ジケールは朝廷から多くの報酬を受けたが、そのほかに高い身分の者に与えられる帽子と勲章を賜るとともに、清朝政府から黄馬褂（最高級の軍事奨励である特別の黄色衣服）を授けられている。ジケールは福州造船局を退

いた後も、依然として洋務派の官僚を続け、1877年には、李鳳苞とともに中国国費留学生（福州船政学堂の学生達）を率いてヨーロッパへ赴くほか、李鴻章から命じられた西洋製武器、機器購入の代表のひとりでもあった。

1880年、ジケールとマッカートニーは清国駐在英仏公使を陪って清朝政府とロシア政府の友好関係の仲立ちの役割を果たした。1883年～1885年の中仏戦争中には、ジケールは両国の正式顧問に準ずる役職に就任している。彼は、1886年6月、中国人留学生の監督在職中に亡くなっている。

著書に《福州船政局とその成果》（L'arsenal de Fou Tcheou, ses résultats）（1874年）があり、同年、H. ラング（H Lang）によって英語に翻訳された。訳名は《福州船政局とその成果—1867年の開始から外国支配の終焉まで—1874年2月16日》である。

4. ドイツ人グスタフ・フォン・デートリング（Gustav von Detring, 中国名德瑾琳）と西洋近代産業導入

デートリングの青年時代に関する資料はきわめて少なく、判明しているのは、1842年にドイツのイリシで生まれ、ヤチンの中学を卒業した後、ベルギーのブリュッセル市のあるシルク会社で働いていたということだけである。その会社で彼は清国税関のイギリス人から入関の誘いを受けた。1865年4月、彼は税関の仕事に就き、1872年に税務司になり、1875年には、煙台税関に派遣された。1876年、李鴻章は清国駐在のイギリス公使トーマス・ウェイド（Thomas Wade, 中国名妥瑪威）とマカリ事件の善後策を談判するため煙台に赴いた。清国税関の総税務司ロバート・ハート（sir Robert Hart, イギリス人, 中国名赫德, 1835年～1911年）も両者の仲裁人ならびに李鴻章の顧問として煙台に赴いた⁹⁾。彼はデートリングの外に経験豊富な外国人税関職員二名を助手として帯同していたが、四人の中でデートリングだけが談判の全過程で重要な役割を果たした。この煙台におけるデートリングの働きぶりは李鴻章に強い印象を残し、翌年彼は李鴻章直隸総督及び北洋大臣の役所の所在地である天津に派遣された。ここから

李鴻章とデートリングの二十年に及ぶ親密な関係が始まることとなる。デートリングは1877年から1908年まで、直天津税関の税務司を務めた[図4]。デートリングは、マッカートニーの金陵製造局、容闈のアメリカ留学生、ジケールの福州造船所のように外国で具体的な指導を行うことは一度もなく、ずっと李鴻章の側近として「参謀と連絡官」の役割を果たした。彼はほとんど毎日李鴻章の傍らにおり、発生する各種の事件について李鴻章に対して随時意見を述べた。フサイムは、李鴻章の外国籍雇員を描写する中で、「デートリングとウィリアム・M・ペチック (William N Pethic, アメリカ人, 中国名畢徳格) は李鴻章の外国人雇員のトップを占めていた¹⁰⁾。李鴻章指導部の外国籍雇員は通常各種の情報については、デートリングかペチックのいずれかを通じて伝達するようになっていた。こうした慣行は、李鴻章がトップダウンで決めたことでもなく、また彼らが命令されて行うことでもなく、デートリングとペチックがほとんど毎日李鴻章と接触し、かつ中国語を話すことができたことから自然に生じてきたものである。デートリングは商業・工業・企業に関する外国人の管理責任者で、また李鴻章の外務事務の連絡人でもあり、李鴻章が雇い入れたヨーロッパ人を掌握していた。ペチックは、海軍の外国籍雇員やその他の一般的な外国人の管理責任者であり、李鴻章が雇い入れたアメリカ人やときにはイギリス人を掌握していた。」と述べている。当時の多くの資料によると、デートリングが李鴻章に対して強い影響力を持っており、かつまた李鴻章からも絶大な信頼を寄せられていたことが判る。ハートの死去により1911年、職務を引き継いだフランシス・アレン (Francis Ahlen, 中国名安格聯) は、「…李鴻章の地位というのはこのように人々が恐れを抱くもので、結局デートリングだけが李鴻章に対して李鴻章に聞かせにくい彼への批判や本心などを話すことができる唯一のひととなった。」と述べている。デートリング自身は李鴻章について、彼を「一隻の舵のない船」に擬えて「李鴻章が天津に赴いたとき、私の役割は彼の舵になることであると認識していた。」と述べている。デートリングが李鴻章

の顧問として何故このような成功を収めることができたのかについて推測するのは難しくない。現存する資料には全て、「彼は李鴻章に対して極めて忠実であった」と記述されている。彼は性格・習慣・思考方法などにおいて典型的なドイツ人であったが、彼は全ての事柄・場面において清国側に立った。彼が李鴻章の「お気に入り」であったことに疑いはなく、デートリングは李鴻章にとって極めて役に立つ人材であった。一方、デートリングのこうした世界主義精神は彼の同胞の攻撃を免れがたく、1875年から1893年までドイツ駐清公使を勤めたブランド（Max von Brandt, 中国名巴蘭徳）は、デートリングに対して「祖国のない冒険家」あるいは「多年にわたり必死になって自分を完全な中国人に見せかけようとしている」と述べており、その他多くの人も彼を批判している。しかしながら公平な立場から見てみると、ドイツがデートリングの清国における特殊な地位を利用して莫大な利益を得ることができたことは疑いようがない事実である。デートリングは自分自身をドイツの利益の代表とはみなさなかったが、一方彼は祖国との関係を軽視するような愚は絶対に犯さなかった。中国へのドイツの武器・戦艦の購入、借款や専門家の雇用などの場面では少なくともデートリングは人の目をひきつける役割を演じ、その結果80年代、英仏の武器輸出商はドイツの会社が特惠待遇を得たことに不平をこぼす度に常にデートリングの名を出した。またデートリングは、李鴻章の顧問としてドイツ人のコンスタンチン・フォン・ハネッケン（Constantin von Hanneken, 中国名漢納根, 1855年～1925年）という人物を推薦している。ハネッケンは、1877年、「名誉のための決闘」を行い、そのためにプロシャ軍を辞めさせられてしまい、彼の父は中国で職を探してもらうように友人であるデートリングに依頼していた。デートリングは、ハネッケンにドイツで二年間工業技術を学ばせてから中国へ呼び寄せた。興味深いのは、デートリングがハネッケンを推薦した理由が彼本人のことではなく、彼の父親に関することであったということである。彼の父親はプロシャ陸軍の中将で、人々に認められた軍事専門家であり、そ

の上デートリングの友人でもあった。このことは、雇用主である中国から見て極めて重要なポイントであったからである。その後ハネッケンが李鴻章麾下で力を発揮しているとき、老ハネッケンは何度も息子に替わって意見を出し、デートリングの意見が道理の通ったものであるということを証明しようと努めている。ハネッケンは李鴻章から旅順と威海の両軍港の防御工事を監督するよう命令を受け、それを成し遂げることによって名を揚げた。1894年彼は北洋艦隊の二名の提督のうちのひとりに任命され日清戦争（黄海海戦）に臨んだ¹¹⁾。デートリングは外国籍で唯一の清国総税務司ハートと影響力や能力において比肩できる人物であった。デートリングは李鴻章の支持を得、ハートは時には総理衙門の支持を受けながら絶えず清国外交事務の支配権をめぐる争っていた。両者の競争とねたみは激しかったが、多年にわたってふたりは一種の「友好」関係を維持し、ときには密接な仲でさえあった。両者はそれぞれ相手よりも優位な部分を有していたが、時にはある計画の成功のために協力し合うこともあった。デートリングとハートはお互いの十分な先見性と度量の豊かさを認め合っていたので、彼らはいくつかのプロジェクトを協力して推進していくことができたのである。ひとつの良い例として清国郵政省の建設がある。ハートはその提唱者であったが、李鴻章の十分な指示を確保するため彼は自分から進んで、デートリングを責任者とするように願い出た。両者は一緒にこの計画を推進しデートリングは李鴻章の影響力を利用し、ハートは総理衙門の影響力を利用した。デートリングは全精力を注入し、またその持てる能力を活用して全国的な近代の郵政事業以外にも鉄鋼、電報、軍事技術の導入と発展に貢献した。日清戦争の敗戦にともない李鴻章に替って袁世凱が登場してくる。その結果、デートリングの事業展開にも困難な状況が生じてきた。日清戦争後デートリングは張翼と緊密な関係を結び、開平炭砒（河北省）の運営に深く関わることとなる。1895年張翼はデートリングを炭砒の責任者のひとりに任命し、1900年には最高責任者である社長に昇格させた¹²⁾。1908年以降彼は中国最大の炭砒で

ある開平炭硯の発展のために全力を傾注した。

5. 清末中国への西洋近代産業導入過程におけるマッカートニーなど四者の類似性

上述の四名は概ね19世紀末中国の西洋技術導入の担い手であったといえることができよう。彼らの経歴はいくつかの点で明らかに似かよったものがあり、これらの類似部分がなぜ彼らが成功し担い手としての地位を獲得したかを物語っている。意識的にせよ無意識にせよ、彼らは皆、権勢のある地方官僚や北京中央政府の官僚との連携に成功している。この点において彼らは前世代のシャル・フォン・ベル（Johann Adam Schall von Bell, ドイツ人, 中国名湯若望, 1591年～1666年）やファアビースト（Ferdinand Verbiest, ドイツ人, 中国名南懷仁, 1623年～1688年）などとは明らかに違っている。彼らイエズス会宣教師たちは皆、皇帝の保護を受けることなどに名望や影響力の源泉を求めたが、マッカートニーや容闳、ジケール、デートリングの時代にはそうした古いやり方ではもうすでに通用しなくなっていた。中国の洋務運動に参加して中央や地方の官僚になることを希望する外国人は多かったがその職を得ることは困難であった。こうした挑戦性に富んだ激烈な競争環境を鑑みると、本稿の四名を代表とする競争者たちは、一体どのようにして抜きん出て勝利者となることができたのであろうか。明らかに判ることは彼らの言語能力と外交才能、そして高度な技術知識と管理能力である。言うまでもなく中国語が話せるということはマッカートニーやジケール、デートリングの職位昇進に大きく作用した。そして英文知識は容闳の助けになった。本稿の四名の生涯にはひとつの共通する特徴がある。すなわち彼らが洋務派のリーダーの下で働く場合、ある限定的な職責を請け負っただけでなく多方面で力を発揮しなければならなかったということである。ジケールとデートリングを例にとると、彼らはまず左宗棠の下で蒸気船と造船関係の教師と顧問を務め、その後福州造船所の設計者、そして造船所の部

品調達員と技師招聘者を兼任、造船の運営が始まってからは更に日常管理を請け負い、同時に中国官僚と外国籍雇員との連絡員としての役割も果たした。マッカートニーや容閔、デートリングは皆、類似の経歴を持っており中国の雇用主たちは彼等の提供する系統だった業務執行を頼りにしていた。早期の洋務雇員は担い手、責任者などに就任する前には多かれ少なかれ教育者の役目を演じなければならなかった。イギリス人が経営する商社の代理は上司に宛てて「1886年まで、李鴻章はほぼ完全にデートリングあるいは外国商務代理に頼っており、彼らが李鴻章に対して武器に関する複雑な内容を説明していた。」と報告している。本稿の四人には専門分野の訓練とそれに関連した経験が不足していた。ジケールとデートリングは福州造船所の建設に取り掛かる以前には船を造るという経験はまったくなかったし、マッカートニーは軍需工場に関わる以前は、軍医であり、容閔は、職業技師ではなく機械に関して明るくなかったが、彼はこの分野で戦略や方策の決定に携わることを求められた。デートリングは専門の分野というものを持たなかったが、全分野に関わらざるを得なかった。最後に、ハネッケンは陸軍出身であったが、海軍に派遣され艦隊を率いた。しかしながら、こうした専門的知識あるいは経験の不足は重要な職務の執行に際していかなる障碍も生じることはなかった¹³⁾。結局これは「信頼」ということに帰着するのである。清朝朝廷と官僚たちが人選に当たり最も重要視したのは「信頼できるか否か」であり、専門的知識、技能、経験などは二の次であったということである。重要な地位を「夷人専門家」あるいは「中国的夷人専門家」に与えた。これはすなわち前代未聞の新しい試みだった。しかし、人選の基準でもっとも重要な基準になったのはやはり清朝とその関係者との繋がりの有無であった。なぜなら、清朝政府は確かでない外国代理人を通じて武器と戦艦を購入し莫大な金銭損出を被っていた。事実政府の多くの外国籍雇員は、本国の最新鋭でない武器や軍艦を高い値段で売りつけたり、自分自身についても同僚の中国人よりはるかに高額な給与を受けており、特に雇用時には「準備」と称して数カ月間

の有給の休暇をとるとというのが常態であった。それではなぜ経験の乏しいジケールやダクベイユ、マッカートニー、容闈、デートリング、ハネッケンが選ばれたのであろうか。洋務運動の領袖たちは彼らのそれまでの経歴に厚い信頼を置いたのである。当時信頼は専門知識よりもずっと重要であると受け止められていた。ところでここで指摘しなければならないことは、ジケールやマッカートニー、容闈はみな1870年代、洋務運動の早期に雇用された人たちであり、その後洋務運動の絶え間ない拡大発展に伴って中国と西洋各国との接触が日増しに深まっていき、さらには清朝官僚の洋務運動の経験が積み重なるにつれて、彼等はますます専門家を求めることに力を入れ始めるようになった。例えば、ハネッケンは雇用の際、武器交易不參與の保証や、さらに中国語の学習をしなければ給与は増額しないなどを条件とする契約書を提示されサインを求められている。このことは、中国の官僚たちが少なくともすでに「夷人専門家」の雇用に対して管理を始めたことの表れである。注目すべきは、デートリングの指導により、ハネッケンは清国入国前に二年間工業技術を学び、高水準の知識を取得していることである。デートリングは、ジケールやマッカートニー、容闈たちから十年遅れて雇用され専門知識を備えないまま、李鴻章の「武器技術に関する複雑な内容の解釈の助言者」となったが、彼は税関での多年の経験を十分に活かすことができ、李鴻章の西洋諸国と商工業、国際業務の処理を助けるだけの能力を持っていた。これは彼が李鴻章の顧問として力を発揮した主要な領域である。清国政府は外国籍雇員を使うことで彼らの本国とスムーズに交渉が進む点を利用したが、そのことによって彼らの命運は政府の外国製品に対する重点の置き方の変化に伴って起伏を繰り返した。例えば、1880年代初頭、李鴻章はドイツの艦船と武器に興味を持ち始める。そこで彼はフランス人のジケールが購買代理に関わらないようにした。李鴻章がデートリングとハネッケンを起用したのはこの興味の変化と大きく関係したものであった。19世紀の中国において「洋務」という言葉は西洋技術の導入と外交の処理という二種類の活動を指

している。清朝政府はこの両者を厳密に区別してはいなかった。本稿中で検討した四名が正に良い例であり、清朝政府は彼らに頼り西洋技術を導入し、また彼らを厚く信頼し外交を行った。清朝政府の政治上の考慮は外国人雇員の命運に重大な影響を与えたが、他方、彼らの命運は彼らの本国の政策の影響もある程度受けることとなる。清朝政府は外国籍雇員を本国からの技術導入とそれらの国との外交事務処理に利用し、西洋列強も清朝政府に雇用された本国の国民を自らの利益を推進する道具とした。19世紀、清国において活動した西洋技術の担い手の多くは所属会社の製品を売り捌くただの商務代理人の身分でしかなかった。しかしながら本稿中の四名はこれとは別の類型に属し、彼らは清朝政府に洋務専門家として雇用されたので上述したように彼らはしばしば同時にいくつもの役割を演じなければならなかった。そしてこの四名が成功できるかどうかは、彼らに能力があるかどうかと同時に三つの異なる利益、すなわち清国の利益と彼らの本国の利益（容閔のような中国人の場合には彼らと関係のある外国の利益）、そして彼ら自身の利益に対して適切に対処できるかどうかにかかっていた¹⁴⁾。彼らにとっての理想的状況は、中国人が彼らの仕事に対して十分に満足して彼らを完全に信頼しており、西洋諸国も同様に満足して全力で彼らを支持してくれている状態である。そして、双方が彼らを認めてくれれば彼ら自身の利益も自ずから満足な結果になるのである。この四名は三つの利益を平衡させるということである程度の成功を収めたといえよう。彼らは清国と西洋諸国双方から十分に認められ、近代産業技術の伝達者として評価されて、「成功者」としての後半生を送ることができたといえよう。

結 び

十九世紀末期の中国という歴史的環境の中で、西洋諸国が中国で帝国主義政策を絶えず推し進めようとしているとき、また中国が急速に近代化を推し進めているとき、そして西洋技術の人材の必要が差し迫っていたときに、上

述の英仏独米からの技術導入に関する四名の人材は中国の近代産業技術の始動と発展のために歴史的積極的作用を果たすことができたといえよう。彼らにはそれぞれ欠点や問題点があったかもしれないが、中国に対しこれほどの努力をしたということはやはり尋常なことではないといわなければならない。そして中国近代産業技術の導入と発展に大きな業績を残したことは事実であり、私たちは彼らの中国近代化の発展に対する歴史的貢献を忘れてはならないと思う。

注

- 1) 蘆宜宜稿「19世紀末期の中国に西洋技術をもたらした人々」『中国科技史料』1997年3号。
- 2) Demetrus C Boulgek・The Life of sir Halliday Macartney, K.C.M.G. London: John Lane 1908. 131。
- 3) 同上 第222頁。
- 4) Wing Yung・My Life in China and America, New York: Henry Holean d Lompany 1909. 131. 151。
- 5) 丁日昌に関する事跡は『丁日昌與自強運動』呂実強著、台湾中央研究院（1972年出版）参照。
- 6) 吳汝倫『李文忠公（鴻章）全集・訳署函稿』台北・文海出版社、1980年第二卷51頁。吳汝倫『李文忠公（鴻章）朋函稿』台北・文海出版社、1967年第十九卷1262—1263頁。
- 7) 楊書霖『左文襄公（宗棠）全集・奏稿』台北・文海出版社、1979年第十五卷25頁、第七卷14頁。
- 8) 郭鼎儀等『海防档・福州船廠』台北・台湾中央研究院近代史研究所、1958年第一卷394頁、楊書霖『左文襄公（宗棠）全集・奏稿』台北・文海出版社、1979年第二十卷64—68頁。
- 9) ロバート・ハートは、1853年にイギリスのベルファスト女王大学を卒業して外務省に入り、翌年中国香港駐中商務監督署の見習生として

赴任し、まもなく駐寧波領事館副通訳になった。1859年5月、中国
広州税関副税務司となり、1863年9月、上海税務務司に任命された。
彼は、同年11月には清国政府の総税務司（税関長官）に任命された。
彼は就任すると直ちに税関業務の発展のために機械や組織の大改革に取り
組み中国税関管理制度を確立した。彼は、中国の産業近代化政策と実
施案について清国政府に提言をしている。彼は、四十数年にわたって総
税務司を務めた。

10) ウィリアム・N・ペチックは、かつて米国駐天津副領事を務め、李鴻
章の秘書も務めた。

11) ハネッケンは、かつてドイツ軍人であったが、1879年退役後二年
間大学で工業技術を学び、デートリングの紹介により、中国に赴いた。
天津で教官となり、李鴻章の副官も兼任した。彼は、旅順港軍事防衛強
化を命ぜられ、砲台設計から建設までを行った。その後、彼はデートリ
ングの娘婿となっている。彼は、1917年まで井陘炭硯会社の経営に
携わり、1918年中独外交断絶により一時ドイツに帰国させられたが、
1921年再度中国に戻り、1925年天津で亡くなった。

12) 張翼は、1892年開平炭硯社長になった。1898年直隸及び熱河
両省所属炭硯の総責任者に任命された。開平炭硯の歴史に関しては、El
lsworth Carlson, The Kaiping Mines (1877-1912) Cambrid
ge, Mass, Harvard University, 1957 参照。

13) この種の例は多く挙げられるが、ここではイギリス人のメドウズ (TA
T Meadows, 中国名密妥士) の例を紹介する。天津製造局はメドウズの
協力によって建設された。彼は軍事方面の専門家ではない。彼はイギリ
ス人であるが、天津製造局建設に参加する前の身分はデンマーク駐天津
領事であった。天津製造局の創設者である崇厚は、彼に製造局の設備購
入と外国人技術者募集を委ねた。その後彼は初代総責任者に任命されて
いる。

- 14) ときには第四の利益も考慮する必要がある。それは、彼らの本国以外の西洋諸国の利益である。デートリングはイギリスの利益を考慮したし、ジケールはイギリスやドイツの嫉妬が齎すであろう影響や問題を回避するために、福州船政局付属水師学堂にフランス語以外に、英語科目を開設してイギリス人の海軍教員を招聘している。またドイツ人に福州船政局内で使用する紙幣の印刷を任せている。

参考文献

1. 劉広京、朱昌峻（アメリカ在住）著、陳絳訳『李鴻章評伝』上海古籍出版社、1995年。
2. 清・魏允恭著『江南製造局記』江南製造局出版清末光緒三十一年編印。
3. 田育誠著『中国と世界科学技術発展』吉林科学出版社、1993年。
4. 田育誠稿『国際経営論集』「洋務運動時期における中国近代技術産業の導入と発展の研究（一）」、神奈川大学2002年3月。
5. 孫毓棠編『中国近代工業史資料』第一輯、科学出版社、1957年。
6. 祝慈寿著『中国近代工業史』重慶出版社、1989年第1版。
7. 馮天瑜他著『中華開放史』湖北人民出版社、1996年第1版。
8. 田育誠稿「清末における李鳳苞と徐建寅による欧州大型軍艦導入に関する一考察」、日本科学史学会年会（東京工業大学）、2004年5月。
9. 林慶元著『福建船政局史稿』福建人民出版社、1986年第1版。
10. 張洪祥著『近代中国通商と租界』天津人民出版社、1993年第1版。
11. 林崇墉著『沈葆楨與福州船政』台湾・台北聯經出版事業公司出版、1988年。
12. 詹慶華稿「中国近代税関貿易報告の伝播と影響」『厦門大学学報』、2003年4号。

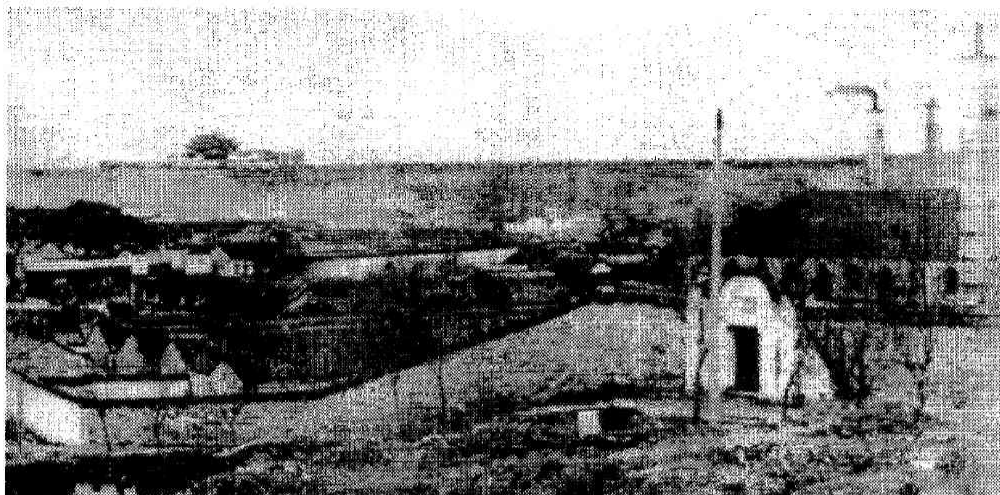


図1 1865年（同治四年）に創設された金陵（南京）
機器製造局〔南京聚宝門（現中華門）〕

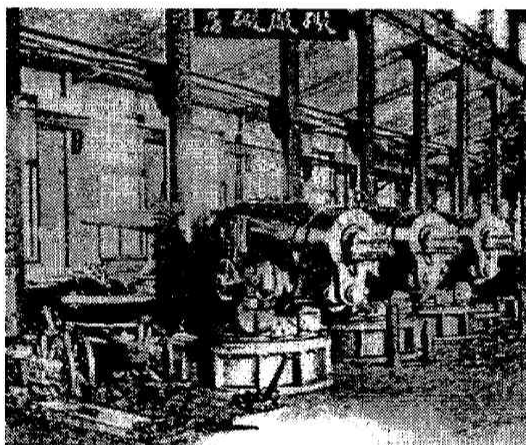


図2 清末江南（上海）製造局
（総局）大砲工場

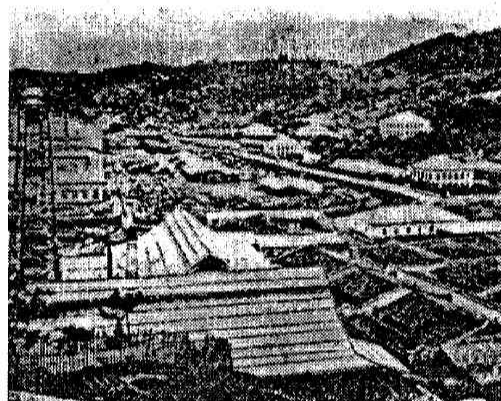


図3 1866年に創設された
福州船政局

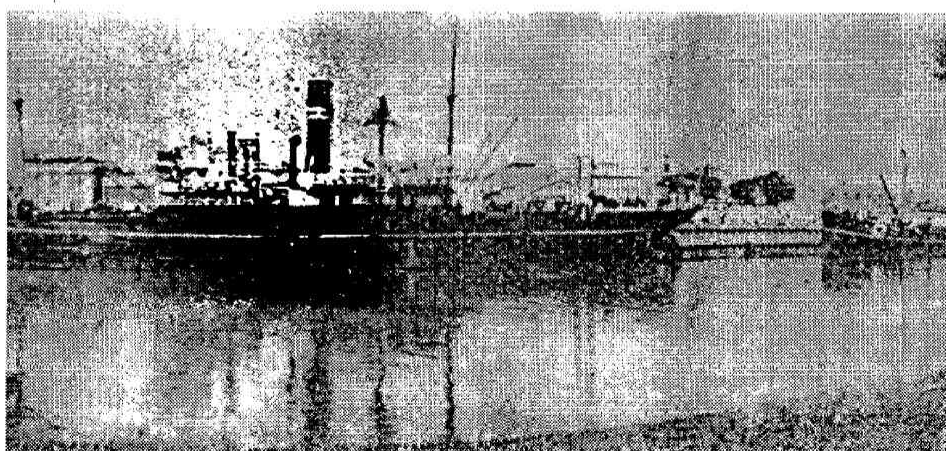


図4 清末天津港紫竹林埠頭